



Daiichi-Sankyo

# 第一三共グループ 環境データブック2024

## 本誌の位置付け

本誌は、当社バリューレポート2024とウェブサイトの環境データ等の情報およびそれらを補完する情報を記載しています。バリューレポート2024、ウェブサイトとあわせてご覧ください。

## 目次

1	環境マネジメントシステム	P 1
2	省エネルギー・地球温暖化防止への取り組み	P 6
3	資源の有効活用・環境負荷の低減	P 9
4	環境リスクの低減	P 10
5	気候変動および水リスク	P 11
6	生物多様性への取り組み	P 15
7	環境コミュニケーション	P 18
8	サイトデータ	P 19
9	ESGデータ(環境)	P 21

### 第一三共グループ EHS ポリシー

第一三共グループは、環境の保全と健康と安全を確保した企業活動を経営の責務と考え、環境(Environment)、健康(Health)、安全(Safety)に関するグローバルEHS方針を定めます。

第一三共グループは、すべての企業活動において環境の保全と健康と安全の確保を重要な経営課題と位置付け、EHSに関する取り組みを実施します。

私たちは、環境の保全と健康と安全の確保に関する各国の法令および国際的な取り決めを遵守するとともに、より高い目標を定め、その達成を目指します。

私たちは、環境の保全と健康と安全の確保を推進するため、組織の役割と責任を明確にし、継続的な改善を行うためのEHSに関するマネジメントシステムを構築します。

私たちは、環境の保全と健康と安全の確保に関する教育・啓発活動を通じて、EHSに関する知識や意識の向上に努めます。

私たちは、環境の保全と健康と安全の確保について積極的な情報開示とコミュニケーションを行い、ステークホルダーへの説明責任を果たします。

### EHS基本方針

- (1) 製品の研究開発から生産、流通、使用、消費、廃棄に至る当社グループの業務プロセスおよびサプライチェーンにおける環境負荷の低減
- (2) 従業員が安全に就業し、健康を保持・増進するための労働環境の整備
- (3) EHSマネジメントシステムの構築、運用、評価および改善
- (4) 環境および安全衛生関連法規等の遵守
- (5) EHSリスク低減および危険源の除去
- (6) 資源・エネルギーの効率的利用、温室効果ガス排出量削減、水の適正利用と排水管理、廃棄物の削減およびリサイクルの推進、生物多様性の尊重、森林破壊の防止
- (7) 健康障害および労働災害の防止
- (8) EHS教育・啓発活動
- (9) 社内外のステークホルダーとのEHSコミュニケーションおよび協議等への参加

# 1 環境マネジメントシステム

## 1-1 環境経営の考え方

地球温暖化や異常気象などの環境問題は、私たちの生活や仕事にも影響する身近な課題といえます。第一三共グループは、環境問題に対し責任ある企業活動を行うために、第一三共グローバルEHSポリシーおよびEHS基本方針に基づき、グローバルに環境経営を推進しています。

## 1-2 環境経営の推進

環境問題に適切に対応していくため、環境問題に関する社会からの要請・期待と中長期的な事業との関係性を踏まえ、省エネルギー・省資源を中心とする環境負荷の低減、気候変動や水リスク、生物多様性などの環境課題に取り組む持続可能な社会への貢献、法令遵守とマネジメントシステムの確立による環境リスクの低減を主なサステナビリティ課題として捉え、KPIおよび環境目標を定め、社内外への適切なコミュニケーションと情報開示を行い、環境経営を推進しています。第5期中期経営計画中の環境目標として、右図の定量・定性目標を定めています。

### 第5期中期EHS経営方針・目標(数値目標・主な活動)

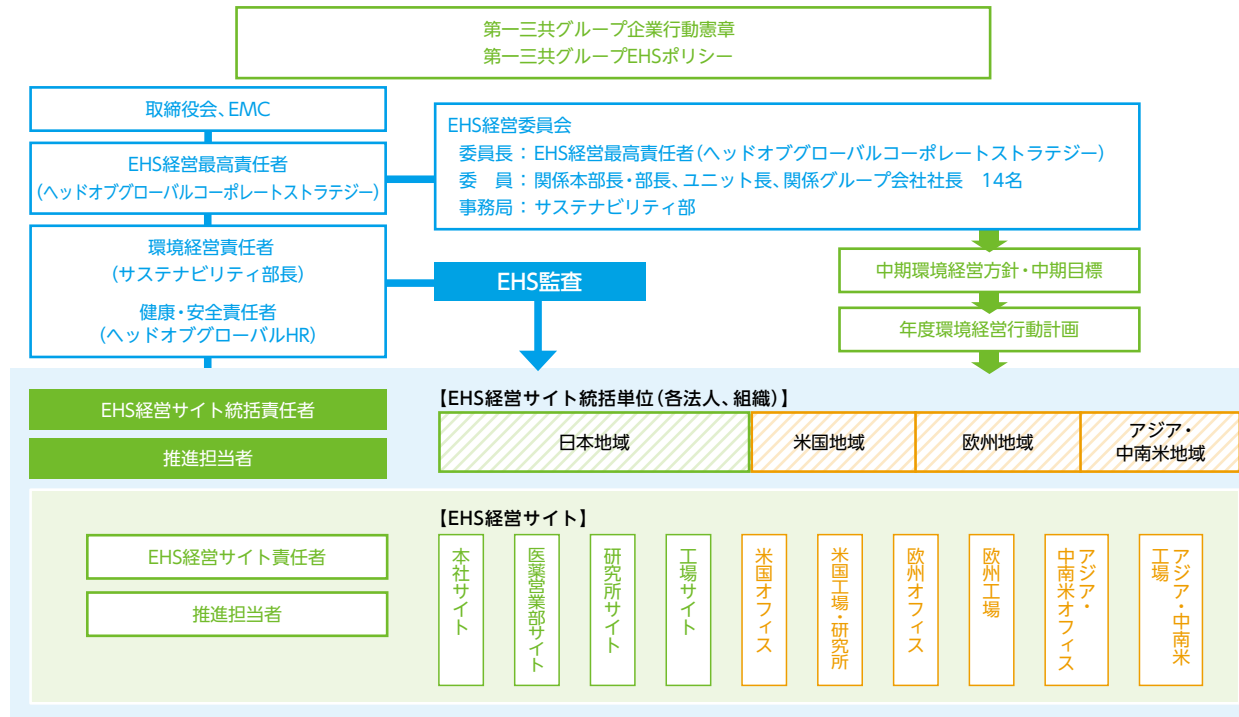
第5期中期EHS経営方針	目標
省エネルギー・省資源、温室効果ガス・廃棄物の削減に取り組み、サプライチェーン全体の環境負荷の低減を実現する	<ul style="list-style-type: none"> <li>CO<sub>2</sub>排出量 (Scope1 + Scope2) : 2015年度比42%減</li> <li>CO<sub>2</sub>排出量 (Scope3, Cat1) : 2020年度比売上高原単位15%減</li> <li>ビジネスパートナー・エンゲージメント (Scope3, Cat1) : ビジネスパートナーの70%以上が1.5°C水準の目標を設定</li> <li>エネルギー使用量 : 2015年度比売上高原単位30%減</li> <li>産業廃棄物排出量 : 2020年度比売上高原単位10%減</li> <li>廃棄物発生抑制および再資源化の推進</li> </ul>
気候変動を始めとする資源循環、水リスク、生物多様性など、環境課題に先進的に取り組むことで持続可能な社会を実現する	<ul style="list-style-type: none"> <li>再生可能電力利用率 : 利用率60%以上</li> <li>水消費量 : 2020年度比売上高原単位10%減</li> <li>廃プラスチックリサイクル率 : 70%以上を維持</li> <li>水災マニュアルの整備率 : 日本国内の研究所・生産事業場100%</li> <li>脱炭素社会に向けた先進的環境技術等の導入を推進</li> <li>大気および水域への汚染物質排出量の把握および継続的な削減</li> <li>生態系サービスおよび資源の持続可能な利用の推進</li> </ul>
関連法令の遵守およびマネジメントシステムの継続的な改善により、環境・労働安全衛生のリスクを最小化する	<ul style="list-style-type: none"> <li>有害廃棄物排出量 : 2020年度比10%減</li> <li>ISO14001取得率 : 生産事業場100%</li> <li>EHSマネジメントシステムの確立</li> <li>定期的なEHS監査の実施</li> <li>サプライチェーンとの協働によるEHSリスクの低減</li> </ul>
環境教育、健康・安全教育、啓発活動などの社内コミュニケーションを推進し、社員の実践に繋げる	<ul style="list-style-type: none"> <li>環境事故の未然防止のための教育・啓発</li> <li>EHSに関する全社員教育および専門教育</li> <li>EHSに関する社員モチベーション向上施策</li> </ul>
開示情報の充実とステークホルダーとの対話を通じ、社会からの信頼を獲得する	<ul style="list-style-type: none"> <li>第三者保証のカバー率 : 100%</li> <li>TCFD提言に基づく定期的な検証および情報開示</li> <li>持続可能な開発に向けたパートナーシップの推進</li> </ul>

# 1 環境マネジメントシステム

## 1-3 環境経営推進体制

ヘッドオブグローバルコーポレートストラテジーがEHS経営最高責任者としてグループ全体のEHS経営を統括し、サステナビリティ部長が環境責任者として環境経営を推進しています。環境経営の推進体制としては、事業活動を考慮したEHS経営サイト統括単位を定め、各EHS経営サイト統括単位は、必要に応じ地域・機能を考慮したEHS経営サイトを定め、目標管理をしています。EHS経営最高責任者を委員長としたEHS経営委員会を設置し、第一三共グローバルEHSポリシーの決定など重要事項を審議し、その結果を取締役会およびEMCに報告しています。

第一三共グループ環境経営推進体制図



## 1-4 EHS内部監査

2023年度 EHS内部監査実施事業所

会社	事業所など
第一三共株式会社	本社サイト 品川サイト 葛西サイト
第一三共ヘルスケア	本社 研究センター 第一三共ヘルスケアダイレクト*
第一三共製薬(上海)	上海工場
第一三共ブラジル	アルファビレ工場

\*株式会社アイムは、2024年4月より社名を「第一三共ヘルスケアダイレクト株式会社」に変更しました。

# 1 環境マネジメントシステム

## 1-5 ISO14001 認証取得状況

環境負荷の高い生産機能を有する事業所ではISO14001を取得しています。

### ISO14001 認証取得事業所一覧(2024年6月末現在)

	会社名	事業所	初回登録
第一三共グループ (マルチサイト認証)	第一三共株式会社	サステナビリティ部	1998年1月
		製薬技術本部(平塚)	
		バイオリジクス本部(館林)	
	第一三共プロファーマ株式会社	平塚工場	
		技術部	
	第一三共ケミカルファーマ株式会社	小名浜工場	
		館林工場	
		バイオ技術部(館林)	
		小田原工場	
	第一三共バイオテック株式会社	北本事業所	
第一三共ハピネス株式会社	平塚		
第一三共ヨーロッパ	パッフェンホーフェン工場	2019年12月	
第一三共アルトキルヒ	アルトキルヒ工場	2019年3月	
第一三共製薬(上海)	上海工場	2019年3月	
第一三共ブラジル	アルファビレ工場	2012年3月	
生産事業所のISO14001取得率 (2023年度のエネルギー使用量ベース)	国内	100%	
	グループ全体	89.3%	

なお、その他の事業所でも、ISO14001に準じた環境マネジメントシステムを構築するため、「第一三共グループEHSマネジメントシステム基本文書」を定め運用しています。

## 1-6 環境サプライチェーンマネジメント

主な取り組み	内容
ビジネスパートナー行動規範の設定	2019年4月に第一三共グループ調達ポリシーに関連し、ビジネスパートナー行動規範が制定されました。これは、製品・サービスを提供いただくビジネスパートナーへの持続可能な調達を推進していくための期待をまとめたものです。この中で、環境に関する項目は以下(4.環境経営の推進)です。  ビジネスパートナー行動規範 4.環境経営の推進 (1)温室効果ガス排出量の削減 (2)廃棄物および排出物の適切な管理・削減 (3)漏洩および漏出の防止と軽減 (4)省エネルギー・省資源の推進 (5)生物多様性への対応
サステナブル調査の実施	主要なビジネスパートナーに対して、「サステナブル調査」を3年1サイクルで実施し、当社グループのサステナビリティに関する考え方への理解と協力を求め、双方向のコミュニケーションの強化を図っております。本調査では、ビジネスパートナー行動規範やグローバル製薬企業で構成される非営利団体PSCIの原則に準拠し、「倫理観に基づいた誠実な事業活動」、「人権尊重と労働」、「安全衛生」、「環境経営の推進」、「最適な品質とコストおよび安定供給の確保」、「マネジメントシステム」などに関連する設問に回答いただいています。
サプライヤーとの協働	主要サプライヤーにおいて、CO <sub>2</sub> 排出量・水使用量を把握するとともに、CO <sub>2</sub> 削減目標を設定していないサプライヤーについては、改善の機会として目標設定への協力をお願いしています。この取り組みは、SBT(Science Based Targets)*の目標設定に基づいて実施しています。 * パリ協定の目標である世界の平均気温情報「2°C未満」の達成に向け、科学的根拠と整合したCO <sub>2</sub> 削減目標を企業に求める国際的イニシアチブ
物流パートナーとの協働	製品輸送に関する輸送重量および輸送距離データの共有、物流センター内でのアイドリングストップ、エコ運転など、温室効果ガス削減につながる要望を伝え、実践していただいています。
EHS内部監査への協力	製品および販促物の保管・発送を委託している協力企業には、廃棄物管理など環境法令に関する監査に協力をいただいています。

# 1 環境マネジメントシステム

## 1-7 事故・緊急事態への対応

特に環境リスクの高い各工場・研究所では、災害・事故などによる環境汚染の防止および緩和も含め、緊急事態への準備および対応の手順を定め、定期的な教育・訓練を行うとともに、関連設備の維持・保全を行っています。

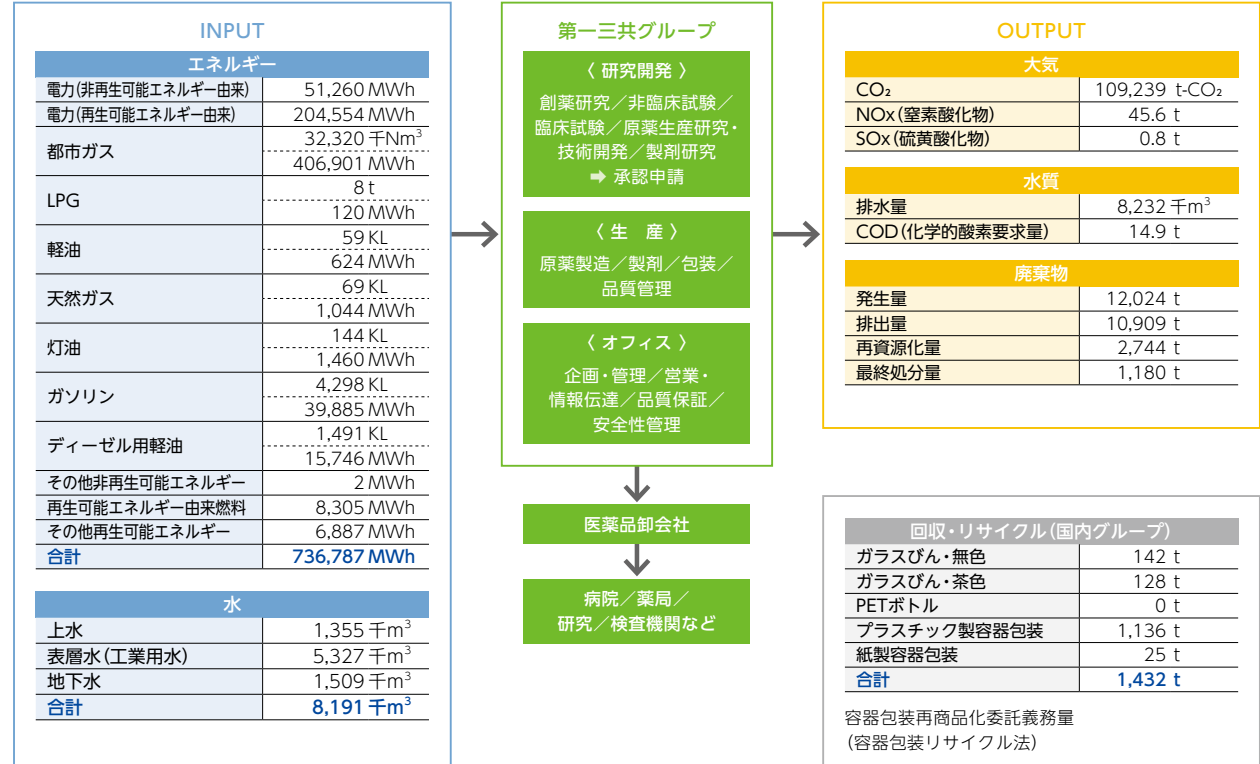
近年は、水災リスクに対する取り組みも強化しています。

### 訓練実施状況(工場・研究所)

会社	事業所	主な実施内容 (想定される事象)	実施回数 (回)	延べ参加 人数(名)
第一三共	品川 サイト	大規模地震、火災、 救護訓練、 防災教育講演会他	9	3,419
	葛西 サイト	大規模地震、火災、 緊急通報、救護訓練、 安否確認	14	825
第一三共プロ ファーマ	平塚 サイト	大規模地震、火災、 漏洩他	72	1,590
第一三共ケミ カルファーマ	小名浜 サイト	大規模地震、火災、 漏洩、救護訓練、 緊急通報	18	605
	館林 サイト	大規模地震、火災、 薬液、溶媒等の漏洩	25	667
第一三共ケミ カルファーマ	小田原 サイト	大規模地震、火災、 漏洩、救護訓練、 安否訓練、降灰訓練	60	1,430
	北本 サイト	大規模地震、火災、 漏洩、緊急通報、 救護訓練、安否確認	9	1,194

## 1-8 事業活動と環境パフォーマンス

### 事業活動とインプット・アウトプット(グループ全体)



# 1 環境マネジメントシステム

## 1-9 環境会計

### 環境保全コスト(国内グループ)

(百万円)

環境項目	2022年度		2023年度	
	投資額	費用額	投資額	費用額
公害防止コスト	102	68	92	142
地球環境保全コスト	490	327	1,051	1,090
資源循環コスト	4	360	63	591
上・下流コスト		65		70
管理活動コスト		651		684
研究開発コスト		50		50
社会活動コスト		0		0
環境損傷対応コスト		37		704
<b>合計</b>	<b>596</b>	<b>1,557</b>	<b>1,206</b>	<b>3,332</b>

\* 減価償却費は集計対象としない

### 経済効果(国内グループ)

(百万円)

	2023年度
有価物売却額	0.3

### 環境保全効果(国内グループ)

	単 位	2022年度	2023年度	対前年度増減量	対前年増減率
エネルギー総使用量	GJ	2,651,601	2,916,899	265,298	10%
水使用量	千m <sup>3</sup>	7,860	7,800	△ 60	△ 1%
PRTR物質使用量	t	2,074	1,340	△ 734	△ 35%
CO <sub>2</sub> 排出量	t-CO <sub>2</sub>	63,127	62,658	△ 469	△ 1%
廃棄物等総発生量	t	13,406	12,024	△ 1,383	△ 10%
廃棄物等排出量(=外部委託処理量)	t	10,346	8,830	△ 1,515	△ 15%
廃棄物再資源化量	t	1,437	1,467	30	2%
廃棄物最終処分量	t	479	389	△ 90	△ 19%
再資源化率	%	13.9	16.6	-	3%
容器包装回収・リサイクル量	t	2,906	1,432	△ 1,474	△ 51%
SOx排出量	t	0.8	0.6	△ 0.2	△ 30%
NOx排出量	t	47.5	41.2	△ 6.3	△ 13%

\*各環境パフォーマンスデータは過去の関連会社の買収・売却による影響を遡って反映しています。

# 2

## 省エネルギー・地球温暖化防止への取り組み

### 2-1 基本的な考え方

当社グループでは、第5期中期EHS経営方針において「省エネルギー・省資源、温室効果ガス・廃棄物の削減に取り組み、サプライチェーン全体の環境負荷の低減を実現する」を掲げ、資源・エネルギーの効率的利用に努めています。気候変動に対する責任ある企業活動として、パリ協定の目標（世界の平均気温の上昇を産業革命前と比べて1.5℃に抑えること）と整合した「Science Based Targets (SBTi) \*1」の考え方に基づき、2025年度のCO<sub>2</sub>排出量目標として2015年度比▲42%、2030年までのCO<sub>2</sub>排出量目標として2015年度比▲63%を設定しました。第一三共ケミカルファーマ 小名浜工場では新管理棟が2023年3月に竣工し、第一三共グループ初となる建築物省エネルギー性能表示制度 (BELS) \*2の「Nearly ZEB \*3認証」を取得しました。太陽光発電設備については小名浜工場、第一三共ヨーロッパのパッフェンホーフエン工場に続き、第一三共製薬(上海)有限公司の上海工場においても稼働を開始しています。2022年4月より国内の本社ビル、生産事業所、研究所、研修所など13拠点の電力について、実質的な再生可能エネルギー（トラッキング付FIT非化石証書）への転換を行いました。さらに欧州やブラジルの事業所でも、再生可能エネルギーの活用を拡大することでCO<sub>2</sub>排出量削減を実現しています。国内外事業所における一層の再生可能エネルギーの活用に向けた取り組みを継続しています。

2023年度のCO<sub>2</sub>排出量は106,721 t(2015年度比▲51.0%)となりました。CO<sub>2</sub>排出量削減等の「緩和」のみならず、気候変動により顕在化した影響や中長期的に避けられない影響に対する「適応」についても取り組みを推進しています。

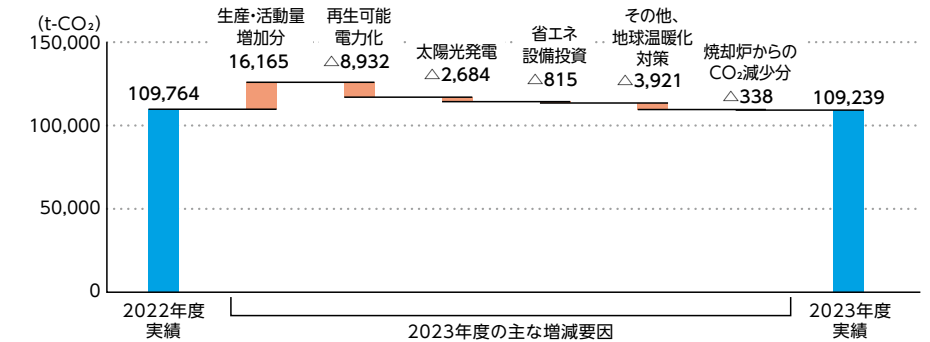
\*1 パリ協定の目標である世界の平均気温上昇(2℃を十分に下回る水準(Well Below 2℃)に抑え、また1.5℃に抑えることを目指す)の達成に向け、科学的根拠と整合したCO<sub>2</sub>削減目標を企業に求める国際的イニシアチブ

\*2 Building-Housing Energy-efficiency Labeling System

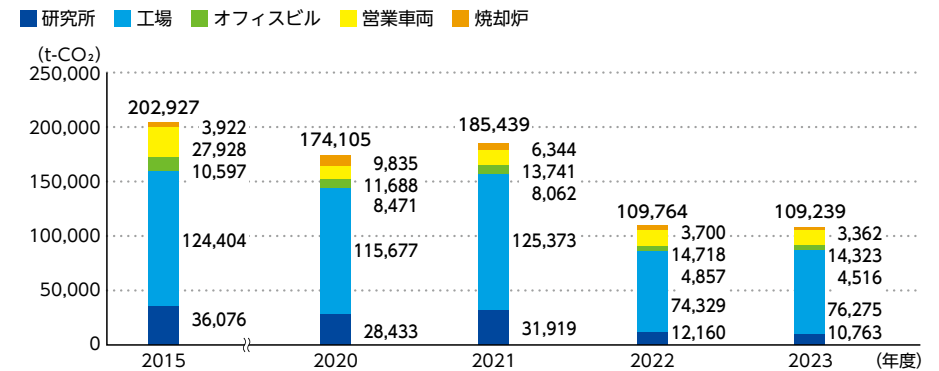
\*3 消費するエネルギーと創出するエネルギーの収支をゼロにするZEB(Net Zero Energy Buildingの略称)に限りなく近い建築物として、エネルギーの収支を75%以上削減した建築物

### 2-2 CO<sub>2</sub>排出量の削減目標と実績

CO<sub>2</sub>排出量の要因別増減量(グループ全体)



CO<sub>2</sub>排出量の内訳(グループ全体)



\*各環境パフォーマンスデータは過去の関連会社の買収・売却による影響を遡って反映しています。



### 2-3 サプライチェーン排出量(スコープ3) (グループ全体)

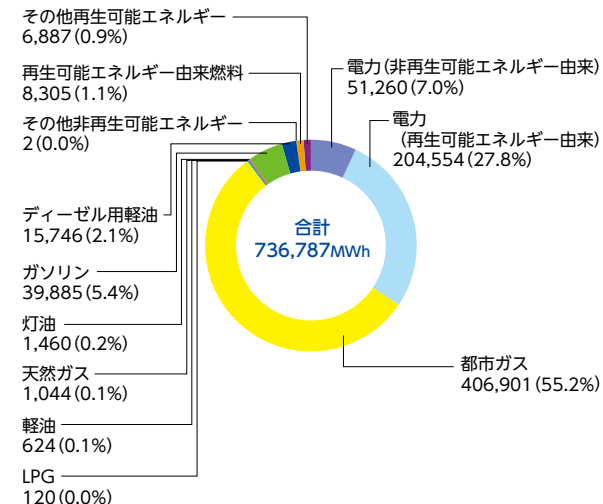
カテゴリー	2022年度 排出量 (t-CO <sub>2</sub> )	2023年度 排出量 (t-CO <sub>2</sub> )*1	対前年 増減率	算出方法
購入した 製品・サービス	1,892,504	3,887,790	105.43%	全ての製品・サービスの調達金額に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。ただし、スコープ1、2およびスコープ3の他カテゴリーに含まれる内容やグループ内取引は除く。
資本財	161,326	220,563	36.72%	固定資産の取得金額に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。
Scope1,2に含まれない燃料およびエネルギー関連活動	24,051	28,217	17.32%	電力・燃料の使用量に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。
輸送、配送(上流)	47,270	49,275	4.24%	当社が委託した輸送や配送、保管に関する費用に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。
事業から出る廃棄物	10,517	10,800	2.70%	工場・研究所から排出される廃棄物の種類別の重量に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。
出張	34,473	44,043	27.76%	出張に伴う移動手段別の交通費および宿泊費に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。ただし、スコープ1に含まれる営業車両の使用分は除く。
雇用者の通勤	10,624	4,926	△53.64%	雇用者の通勤に伴う移動手段別の交通費に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。
リース資産(上流) 貸借	—	—	—	自社が賃借しているリース資産の操業に伴う排出量はスコープ1、2に含まれているため、カテゴリ8は算定対象外とする。
輸送、配送(下流)	14,163	145,857	929.85%	当社のグループ連結の売上高に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。
販売した製品の加工	—	—	—	当社が製造・販売している製品のうち、川下の企業向けに原薬を販売しているものの、該当する排出量が全体に占める割合は極めて小さいことが想定されるため、カテゴリ10は算定対象外とする。
販売した製品の使用	—	—	—	医薬品の特性上、製品使用に基づくエネルギーの使用はないため、カテゴリ11は算定対象外とする。
販売した製品の廃棄	2,747	4,072	48.22%	販売した製品の容器・包装の材料別重量に、ガイドライン等による排出係数を乗じて算出した。
リース資産(下流)	2,820	2,248	△20.29%	自社から他社に賃借している保有資産の用途別の建物床面積に、ガイドライン等による排出原単位を乗じて算出した。
フランチャイズ	—	—	—	フランチャイズ店を運営していないため、カテゴリ14は算定対象外とする。
投資	5,485	10,945	99.54%	株式を保有する各社のCO <sub>2</sub> 排出量(スコープ1+2)に、当社の持ち株比率を乗じて算出した。
<b>合計</b>	<b>2,205,979</b>	<b>4,408,736</b>	<b>99.85%</b>	

\*1 2023年度は排出原単位割当の見直し等の算定方法の変更および活動量の増加により、CO<sub>2</sub>排出量が増加しました。

\*各環境パフォーマンスデータは過去の関連会社の買収・売却による影響を遡って反映しています。

### 2-4 エネルギー使用量

エネルギー使用量の内訳(グループ全体)



### 2-5 再生可能エネルギーの活用

種類	エネルギー量 (MWh)	備考
太陽光発電	131,576	日本、ドイツ、中国のサイトで発電した電力および日本で購入した電力です。
水力発電	62,927	日本およびドイツのグループ会社で購入しています。
バイオマス熱	6,887	ドイツのグループ会社で購入しています。
その他再生可能エネルギー	10,920	日本、ドイツ、フランス、スペイン、中国、ブラジルなどのグループ会社で購入しています。

### 2-6 その他補足事項

#### ① 換算係数とその出典

本データブックで使用している換算係数については、以下のとおりです。

二酸化炭素換算係数およびエネルギー換算係数については、地球温暖化対策の推進に関する法律(以下、温対法)での換算係数(算定・報告・公表制度における算定方法・排出係数一覧)を使用しています。

また、日本以外の国々の係数に関しては、排出源地域の当局等の基準あるいはGHGプロトコルに基づいています。

#### ② 算定除外対象について

排出量データの内、スコープ1、スコープ2ともに、日本を除くスモールオフィスの排出量は算定対象に含んでいません。また、CO<sub>2</sub>以外の温室効果ガス等についても排出量が少ないことから含んでいません。

#### ③ 販売製品の温室効果ガス排出量について

販売製品のうち、その利用により温室効果ガスの排出量を削減するものではありません。

換算係数一覧表(国内)

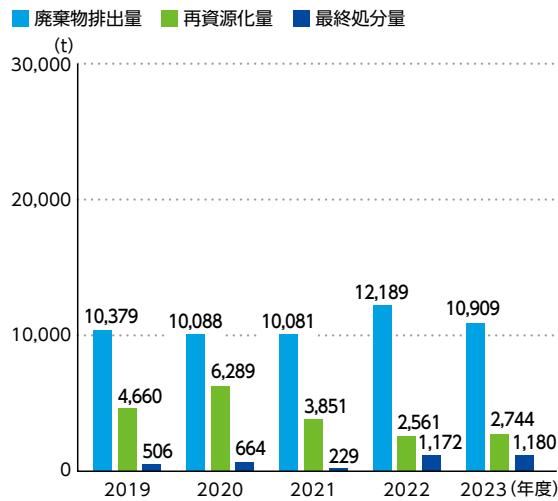
種別	換算係数			
	単位発熱量		二酸化炭素排出量	
電力	—	—	電気事業者別排出係数 (令和5年度12月22日公表)	t-CO <sub>2</sub> /千kWh
A重油	10,805.56	kWh/KL	2.75	t-CO <sub>2</sub> /KL
軽油	10,555.56	kWh/KL	2.62	t-CO <sub>2</sub> /KL
灯油	10,138.89	kWh/KL	2.50	t-CO <sub>2</sub> /KL
プロパンガス(LPG)	13,916.67	kWh/t	2.99	t-CO <sub>2</sub> /t
都市ガス(13A)	11,111.11	kWh/千m <sup>3</sup>	2.05	t-CO <sub>2</sub> /千m <sup>3</sup>
天然ガス(LNG)	15,194.44	kWh/t	2.79	t-CO <sub>2</sub> /t
ガソリン	9,277.78	kWh/KL	2.29	t-CO <sub>2</sub> /KL

# 3

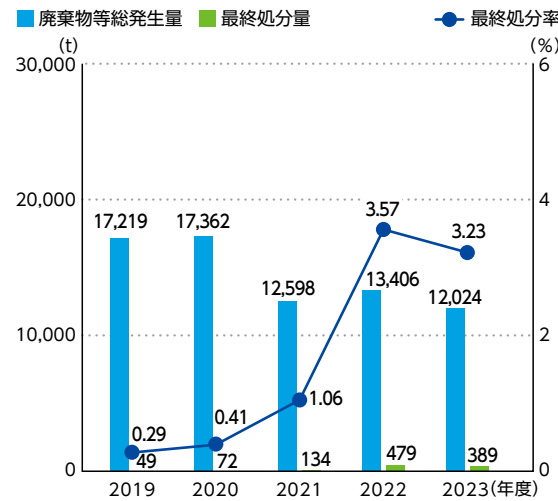
## 資源の有効活用・環境負荷の低減

### 3-1 廃棄物削減の目標と実績

廃棄物排出量・再資源化量・最終処分量  
グローバル(工場および研究所)

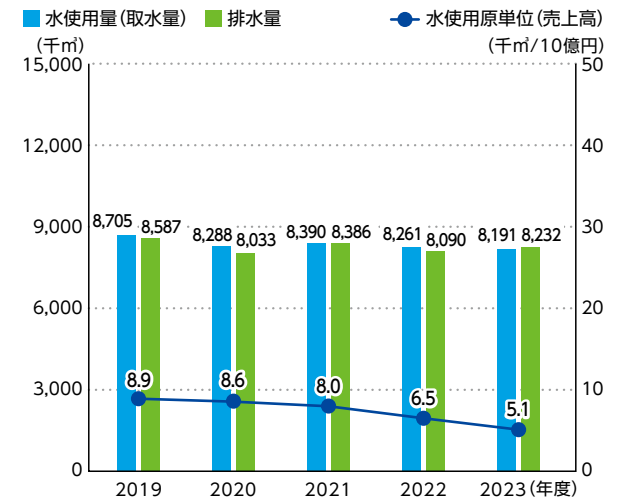


廃棄物等総発生量・廃棄物等排出量  
国内(工場および研究所)



### 3-3 水資源の適正利用

水使用量(取水量)・排水量  
グローバル(工場および研究所)



### 3-2 廃棄物削減への取り組み

事業所名など	主な取り組み
各事業所、営業支店など	事業所内でのOA用紙の使用量削減
本社地区、研究開発センターなど	事業所内のリユースの推進
各工場・研究所と廃棄物処分業者との協同	処理業者の変更、リサイクルの推進

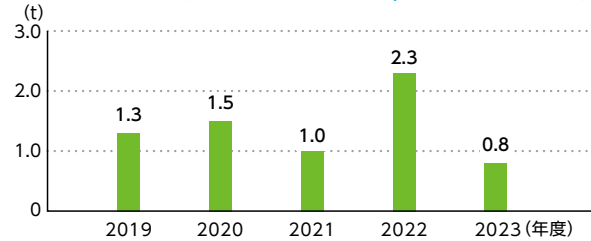
\*各環境パフォーマンスデータは過去の関連会社の買収・売却による影響を遡って反映しています。

# 4

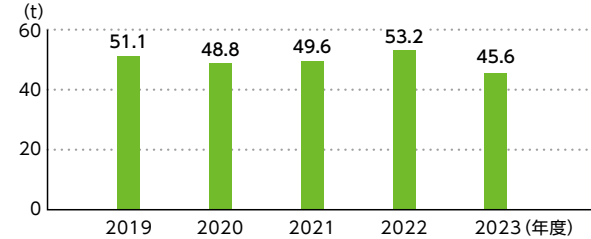
## 環境リスクの低減

### 4-1 大気汚染・水質汚濁防止

SOx(硫黄酸化物) 排出量 グローバル(工場および研究所)

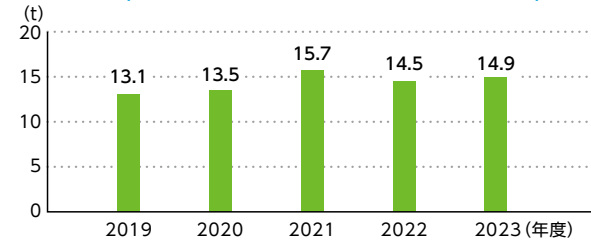


NOx(窒素酸化物) 排出量 グローバル(工場および研究所)



COD(化学的酸素要求量)

グローバル(公共用水域に排水する工場および研究所)



### 4-2 土壌・地下水の汚染防止および対策

土壌浄化対策の進捗状況

事業所	概要
旧野洲川工場跡地 (滋賀県野洲市)	2006年に環境改善工事を実施後、地下水モニタリングを継続しています。その結果、一部の土地に汚染が確認されたため、行政と協議し、適正に浄化工事を実施すべく、土壌調査を実施しています。また、1993年、工場跡地内に農業原料のひとつである水銀が環境基準を超えて分布していることが確認されたため、行政の指導に基づき堅牢な地下保管施設を設置し、これらの土壌を適切に管理してきました。これまで漏洩事故や健康被害発生等の報告はありませんが、将来にわたる地域のより一層の安全・安心を考慮し、また、地元関係者の皆様のご要望等を踏まえ、地下保管施設を撤去することを2020年4月にプレスリリースし、関係者の皆様と協議・調整の上、撤去工事を実施しています。掘削時には土壌が飛散しないよう陰圧にした仮設テントで保管施設全体を覆う形に設置して飛散防止に努めるなど、周辺環境に影響を及ぼさないように配慮しています。

### 4-3 騒音・振動・悪臭防止

騒音・振動・悪臭防止に関する法令遵守のため、適切な対策と継続的なモニタリングを実施しています。

### 4-4 化学物質の取扱量の削減と排出量・移動量の抑制

2023年度PRTR対象物質の排出量・移動量 国内(工場および研究所)

(単位:t、ダイオキシン類はmg-TEQ)

物質名 (年間取扱量が1t以上の物質)	取扱量	排出量		移動量		
		大気	公共用水域	下水道	事業所外(再資源化)	事業所外(その他)
クロロホルム	2.1	0.1	0.0	0.0	2.0	0.0
コバルト及びその化合物	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
塩化メチレン	9.5	0.6	0.0	0.0	8.9	0.0
トリエチルアミン	140.3	0.3	0.0	0.0	140.0	0.0
トルエン	773.8	0.5	0.0	0.0	7.1	570.0
ヘキサン	10.9	0.8	0.0	0.0	7.8	1.8
テトラヒドロフラン	397.4	0.2	0.0	0.0	0.0	300.0
メチルイソブチルケトン	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
<b>合計</b>	<b>1,339.5</b>	<b>2.6</b>	<b>0.0</b>	<b>0.0</b>	<b>165.8</b>	<b>871.8</b>
ダイオキシン類	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

\*各環境パフォーマンスデータは過去の関連会社の買収・売却による影響を遡って反映しています。

# 5

## 気候変動および水リスク

### 5-1 気候変動リスク

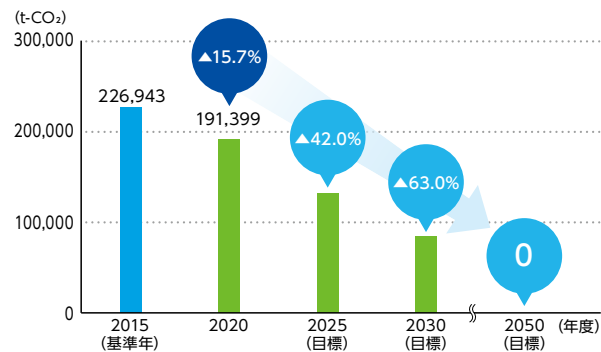
#### ● 長期目標(2030年度に2015年度比63%削減)を見据えたCO<sub>2</sub>削減目標設定

当社グループは、「Science Based Targets initiative (SBTi)\*」に基づいた温室効果ガス削減目標を設定しています。当社グループの事業活動から排出される温室効果ガス削減目標は、世界の平均気温上昇を1.5度に抑えるのに必要な削減量に沿っています。

2023年度のCO<sub>2</sub>排出量は2015年度比51.0%削減を達成しました。国内及び海外の再生可能エネルギー由来電力の購入量や工場における太陽光発電量、省エネ設備投資が増加したことによりCO<sub>2</sub>が削減されました。2024年度以降は、ビジネスの拡大により、CO<sub>2</sub>排出量の増加が予想されますが、今後も省エネ対策や排出係数の低い電力調達、再生可能エネルギーの活用などの取り組みを通じ、2030年の2015年度比▲63%の目標達成を目指します。

\* パリ協定の目標である世界の平均気温上昇「2℃未満」の達成に向け、科学的根拠と整合したCO<sub>2</sub>削減目標を企業に求める国際的イニシアチブ

#### CO<sub>2</sub>排出量の内訳(グループ全体)



#### ● TCFDの提言に基づく情報開示

当社は、2019年5月にTCFD提言への賛同を表明し、2020年にはガバナンスやシナリオ分析結果など、TCFDの開示枠組みに沿った情報開示を行いました。さらに2021年10月に改訂されたTCFD提言に対応した情報開示を進め、気候変動に関するガバナンスや事業戦略の更なる強化を目指します。



#### ガバナンス

企業活動全般において、環境(Environment)の保全と健康と安全(Health & Safety)の確保に努めマネジメントを一体的に運営・推進するため、EHS経営最高責任者を委員長とし、関係組織長(取締役含む)、グループ会社社長を委員として構成する「EHS経営委員会」を設置しています。年2回グローバルEHS経営に関する方針や目標設定、活動の審議・報告を実施しており、審議・報告事項については、取締役会に報告し監督される体制となっています。2023年度は、Scope3削減に向けたビジネスパートナーエンゲージメントの推進およびネットゼロ移行計画策定などについて審議しました。

〈詳しくはこちら〉

コーポレートガバナンス

[https://www.daiichisankyo.co.jp/about\\_us/governance/](https://www.daiichisankyo.co.jp/about_us/governance/)

環境経営推進体制の運用

[https://www.daiichisankyo.co.jp/sustainability/the\\_environment/policy-system/#anc03](https://www.daiichisankyo.co.jp/sustainability/the_environment/policy-system/#anc03)

## 5 気候変動および水リスク

### リスク管理

気候変動や水に関するリスクなど、事業活動の変更を余儀なくされる可能性のあるリスクを把握し、当社グループのリスクマネジメントシステムの一環としてリスク対応策を実施しています。EHS経営委員会は、気候変動による影響が当社ビジネスにどのようなリスクと機会をもたらすのか、その財務的なインパクトを評価・管理し、レジリエンスを高める重要な役割を果たしており、重大リスクの懸念がある場合は取締役会に報告し、総合的リスク管理に統合されます。加えて、長期的なカーボンニュートラルへの移行を目指し、中期及び短期での目標・実施計画を審議・決定しています。

リスク	
1.5℃シナリオ	炭素税導入、再エネ設備導入コスト増、不十分な開示によるレピュテーションリスク発生
4℃シナリオ	サプライチェーン寸断、自社拠点の一時操業停止、気温上昇に伴う空調コスト増、取水リスクによる操業困難化、天然化合物由来製品の生産性低下
機会	
1.5℃シナリオ	SBT達成に向けた各種施策
4℃シナリオ	気候変動に伴い増加する疾患への貢献

〈出典〉1.5℃シナリオ：IEA SDS (WEO2021)、IEA NZE 2050 / 4℃シナリオ：IPCC RCP8.5

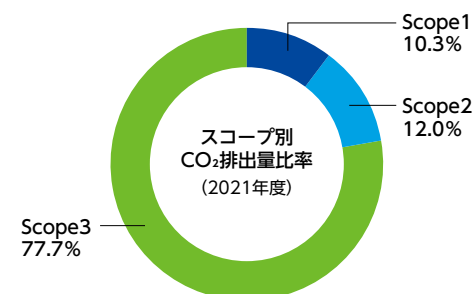
### 戦略

地球への環境負荷が増大する中、持続可能な社会が実現されなければ、企業活動を行っていくことはできません。特に、生命関連製品である医薬品は、気象災害の激甚化に伴うサプライチェーンの寸断や医薬品供給能力の低下は大きな事業リスクであり、社会リスクでもあります。したがって、当社事業の環境負荷低減・脱炭素化を推し進めていくと同時に、ビジネスパートナーとの協働によりサプライチェーン全体の脱炭素化も推進し、カーボンニュートラルの達成と物理的影響を緩和することが重要であると考えています。

一方で、CO<sub>2</sub>排出量は事業から直接排出される排出量 (Scope 1、Scope 2) は少な

く、サプライチェーンから排出される排出量 (Scope 3) が多いことが特徴です。このような認識に基づき、気候変動に伴う当社ビジネスへの影響を把握し、当社のレジリエンス (強靱性) を明確にするため、シナリオ分析を実施しました。

### TCFDの分析に使用したスコープ別CO<sub>2</sub>排出量比率



### ・シナリオ分析の実施

2021年度には部門横断のタスクチームを立ち上げ、関係部門に対し、シナリオ分析の概要及びIEA (国際エネルギー機関)・IPCC (気候変動に関する政府間パネル) が公表するネットゼロシナリオなどに関する勉強会を実施し、2030年以降の事業リスク及び機会について検討を行いました。IEA・IPCCのシナリオを用い、「移行」及び「物理」双方について、バリューチェーン全体のリスク・機会を洗い出し、洗い出されたリスク・機会については、2022年度にEHS経営委員会で審議・評価を行い、承認を受けています。具体的には「調達」「直接操業」「製品・サービス需要」の観点からリスク・機会を洗い出し、6つに分類しました。IEA・IPCCの脱炭素化シナリオ (1.5℃) と、脱炭素化が達成されないシナリオ (4℃) について選択したのは、移行リスク・物理的リスクの両方において、その極端なケースを想定し、予め備えることが重要であると判断したためです。それぞれについて、「発生頻度」「事業影響・財務影響」「投資家の関心有無」の観点から2030年と2050年までを対象に総合的なリスク・機会の評価を実施し、事業への潜在的影響及びレジリエンスを整理しました。



# 5 気候変動および水リスク

## ・シナリオ分析の結果

バリューチェーンごとに事業への潜在的影響およびレジリエンス（強靭性）を整理するとともに財務影響も含め、投資家の視点も加えて総合的な評価を実施しました。

シナリオ	ビジネス環境の変化	リスク・機会	第一三共への潜在的影響	影響度*1	第一三共のレジリエンス	事業リスク*2
1.5℃シナリオ (移行が進んだ世界)	脱炭素関連の政策・法規制強化	炭素税導入	・2030年時点の炭素税が130\$/t-CO <sub>2</sub> に上昇すると想定しても、年間のコスト負担は約15億円～30億円*3	小	・財務的インパクトは限定的であり、1.5℃目標に引き上げた気候変動対策を推進することで更に軽微なものにしていく	低
		再エネ導入に伴う炭素税負担回避	・将来的な炭素税導入・上昇の対策として、再エネ調達による排出量削減が重要	小	・再生可能エネルギーを積極的に活用することにより、2030年時点の年間の炭素税負担回避額は約16億円～32億円 ・国内外事業所の電力は、2030年度までに100%再生可能エネルギー由来に転換する	機会
		再エネ設備導入コスト増	・エネルギー源は電気・ガスが中心。地域によっては既に再エネ電力を調達 ・既存の電力をすべて再エネにした場合、年間のコスト負担は約3～6億円	小	・再エネ・省エネ設備の追加費用は低下傾向であり、対策の推進によりコスト削減に繋げる	低/ 機会
		エネルギーコスト等増加	・エネルギー事業会社の脱炭素対策が実施されるが、対策自体の導入・運用コストが増加すると将来的なエネルギー調達コスト増が予想される	小	・化石燃料由来のエネルギーコストの上昇が予想されるが、現時点では影響は限定的	低
		調達コストへの価格転嫁	・ビジネスパートナーが自らの炭素税負担を価格転嫁することで調達コストが増加する可能性があり、供給網全体での排出量削減が重要	中	・ビジネスパートナーとの協働により、スコープ3の削減を進め、炭素税負担の回避に繋げることで調達コストの上昇を抑える	低/ 機会
	企業評価に対する脱炭素への取組の影響増大	企業価値の増大	・脱炭素への取組がESG投資家から評価され、株価上昇など企業価値向上に繋がる	大	・脱炭素社会に向けた取り組み、TCFD提言への積極的な対応、株主・投資家の期待に応える情報開示を行うことで評価向上に繋げる	機会
4℃シナリオ (物理的影響が大きくなる世界)	気象災害 (大雨・洪水・台風)の発生頻度増、規模拡大	サプライチェーン寸断	・安定供給に支障をきたすリスクの高まり ・生産・出荷不能により、工場停止や売上減などのリスク	大	・在庫管理を強化し、災害時でも安定供給に努める ・複数社からの購買を実施、複数社から購買できていない原料については今後検討していく	中
		自社拠点の一時操業停止	・重要な研究・製造拠点が浸水する可能性(水災リスクは総計約94億円) ・製造拠点の一部は河川に近くとも浸水の可能性は低いが、交通寸断などにより一時操業停止の可能性	大	・BCPの観点から拠点の水災リスク評価を実施し、強靭化を進めている ・緊急事態訓練における洪水対応・減災対策を強化し、水災マニュアルの整備・実証を担保してレジリエンスを高める	低
		異常気象(浸水)による不良在庫化	・物流拠点などの浸水に伴い、操業停止に加えて製品在庫も被害を受ける可能性	大	・需要拡大に応える生産ラインの確保、在庫管理強化に努める ・疾病構造の変化やパンデミックも含め、アンメットメディカルニーズ・社会要請の高い疾患に対する研究開発を外注リソースとの連携も合わせ検討する	中/ 機会
	気温上昇	気候変動に伴う疾患増加等	・悪性黒色腫、循環器、呼吸器疾患、各種熱帯病などに対する関連医薬品の需要拡大と社会からの要請・期待の高まり ・疾病構造の変化に伴う既存製品の需要減少の可能性	大	・需要拡大に応える生産ラインの確保、在庫管理強化に努める ・疾病構造の変化やパンデミックも含め、アンメットメディカルニーズ・社会要請の高い疾患に対する研究開発を外注リソースとの連携も合わせ検討する	中/ 機会
		空調設備のコスト増	・本社、研究開発、製造拠点ともに屋内作業が基本であり、気温上昇に伴い空調コスト増が予想されるが影響は限定的	軽微	・コスト増は吸収可能な範囲であり、財務影響は軽微であるが、引き続きエネルギー効率改善に努める	低
		保険料/BCPコストの増加	・気温上昇に伴う風水害の激化により、現在でも火災保険料が増加傾向にある。ただし、将来的な保険料の上昇見通しは限定的	軽微	・日本では4℃上昇時、洪水発生頻度が4倍上昇すると予想されているが、その結果、保険料が数倍に上昇したとしても財務影響は軽微である	低
	水不足	自社拠点の一時操業停止	・最も取水リスクの高い工場である中国とブラジルでの操業停止の可能性 ・その他地域で想定を超える短期的な渇水の可能性	中	・雨水タンク設置・リサイクル水活用などの渇水対策を推進する*4 ・長期に渡り渇水となった場合、薬事規制の動向をみつつ、他拠点活用・製造委託などの緊急時供給対応を検討する	中
		生物多様性の喪失	天然化合物由来製品の生産性低下	・生物多様性の喪失により原料が入手できず生産が止まってしまった場合、約20億円/年の損失が予想される	中	・数年分の原料在庫は確保されており、リスクが顕在化する前に迅速な対応を実施する

\*1 影響度は、軽微(1億円未満)、小(1億円～50億円)、中(50億円～100億円)、大(100億円～300億円)を基準に評価  
 \*2 事業リスクは影響度と発生頻度を考慮し総合的に評価  
 \*3 2030年時点の炭素排出量に炭素価格を乗じて算出  
 \*4 ブラジルのアルファビレ工場に貯水タンク設置(約450万円の費用投入)

## 5 気候変動および水リスク

事業活動に対する直接的な移行リスクは限定的であると認識していますが、サプライチェーンについては、今後、炭素税や移行対策などのコスト上昇がリスクとして考えられます。また、物理的リスクについては、気象災害などの激甚化による安定供給についての懸念があります。このような分析結果に基づき、移行リスクについてはこれまでの省エネ対策の推進に加え、再生可能エネルギーの活用や脱炭素技術の導入、ビジネスパートナーとの協働により、炭素税などの負担回避によるコスト低減を機会として創出していきます。また、物理的リスクについては、水害対策を含めたBCPの深化、サプライチェーンの安定性を高める予防策の実施、多様性の確保、支援策の確保、代替策の確保等の対策を実施することで、当社グループにおける毀損を回避し、持続的な企業価値向上を目指していきます。シナリオ分析で評価・特定された重要なリスク対策については、EHS経営委員会及び取締役会でグループ全体の進捗管理を行っていきます。

### 指標と目標

バリューチェーンごとに事業への潜在的影響及び気候関連のリスク・機会を評価・管理する指標と目標として、第5期中期経営計画におけるKPI及び環境に関する目標を定めています。第5期中期経営計画の進捗を踏まえ、2021年度に気候変動に関わるKPIの見直しを行った結果、Scope 1 及びScope 2 については1.5°Cの世界に対応した目標水準へ引き上げを行うとともに、2022年度には、Scope 3 についてもサプライヤーエンゲージメント目標として、サプライヤーに要請するCO<sub>2</sub>排出量削減目標の設定を「1.5°C水準」へと更新し、2023年6月に、SBTイニシアチブより「1.5°C目標」の認証を取得しました。

〈詳しくはこちら〉

第5期中期経営計画における第5期中期EHS経営方針・目標  
[https://www.daiichisankyo.co.jp/sustainability/the\\_environment/policy-system/#anc02](https://www.daiichisankyo.co.jp/sustainability/the_environment/policy-system/#anc02)

CO <sub>2</sub> 排出量 (Scope 1 + Scope 2)	2025年目標: 2015年度比42%減、2030年目標: 2015年度比63%減
CO <sub>2</sub> 排出量 (Scope 3、Cat. 1)	2025年目標: 2020年度比売上高原単位15%減
ビジネスパートナー・エンゲージメント (Scope 3、Cat. 1)	2025年目標: ビジネスパートナーの70%以上が1.5°C水準の目標を設定
再生可能電力利用率	2025年目標: 60%以上、2030年目標: 100%

### CO<sub>2</sub>排出量

(t-CO<sub>2</sub>)

	2021年度	2022年度	2023年度
Scope 1	89,405	86,006	85,245
Scope 2	96,033	23,758	23,994

算定方法

Scope1:日本の二酸化炭素およびエネルギーの換算係数は、地球温暖化対策の推進に関する法律の数値を使用。日本以外の国々については、排出源地域の当局等の基準あるいはGHGプロトコルに基づく。

Scope2:電力購入の契約に基づく排出係数を用いて算定(マーケット基準)

\*各環境パフォーマンスデータは過去の関連会社の買収・売却による影響を遡って反映しています。

## 5-2 水リスク

WWF-DEG Water Risk Filterを用いて、立地する地域固有の水リスクを分析し結果と、各工場・研究所からの水リスクに関する調査結果を基に、総合的にリスク評価を実施しています。

その結果、上海工場、アルファビレ工場が当社グループの中で最も水リスクが高い事業所であり、取水制限等の規制強化を主なリスク要因として特定しています。

### 水リスクの高い地域に立地する事業所の水使用状況(2023年度)

(千m<sup>3</sup>)

工場立地	流域河川	取水量	排水量	水消費量
上海工場(中国)	Yangtze River(揚子江)	41.4	33.8	7.6
アルファビレ工場(ブラジル)	Parana(パラナ川)	10.1	5.5	4.6
合計		51.5	39.3	12.3



# 6 生物多様性への取り組み

## 6-1 基本的な考え方

### 生物多様性基本方針・行動指針

#### 基本方針

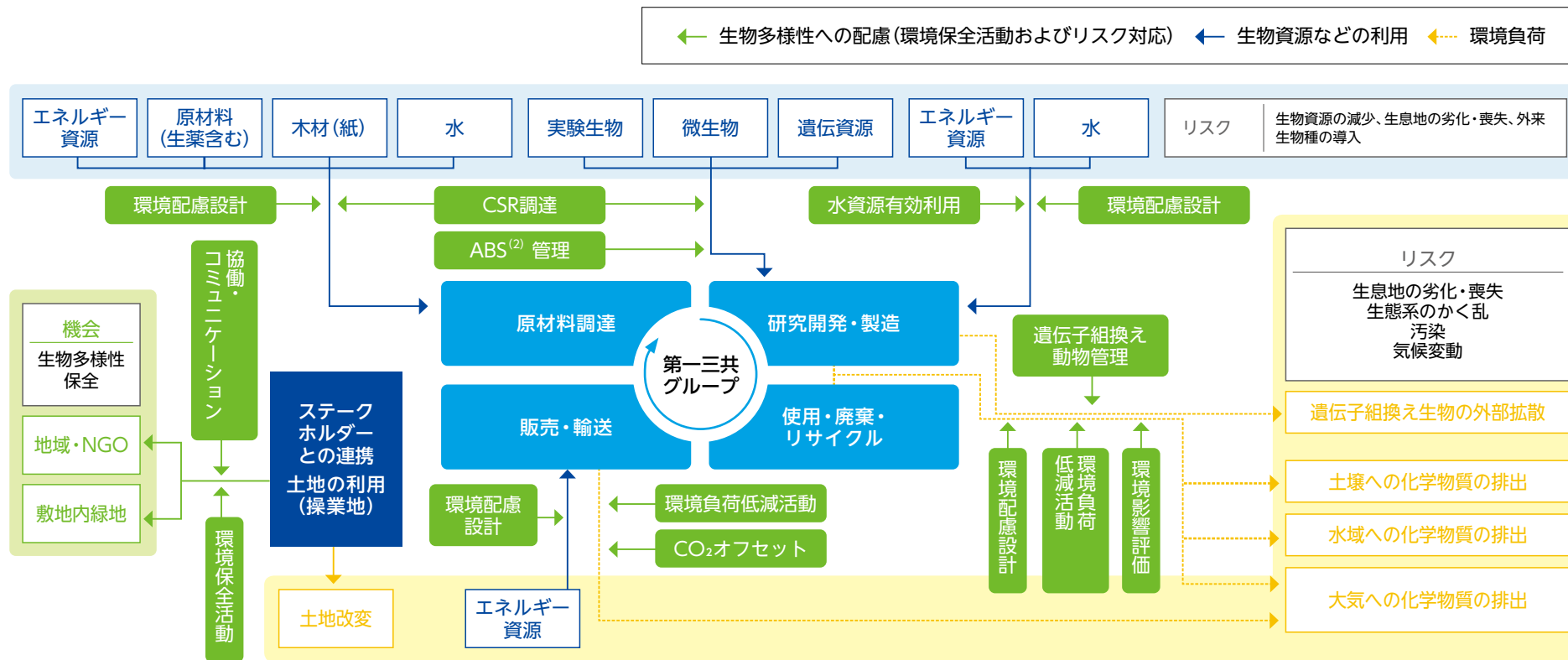
- 私たち第一三共グループは、環境経営基本方針において「すべての生命活動の基盤となる地球環境の保全を重要な経営課題」と位置付け、汚染予防、地球温暖化防止、循環型社会形成などの取り組みを通じて、生物資源の適正な利用、また化学物質などの排出を継続的に削減するなど、事業活動による生物多様性への影響を最小限にする努力を行って参りました。
- 引き続き、私たちは生物多様性保全の重要性を認識するとともに、生物多様性条約の理念を尊重し、以下の生物多様性行動指針に基づいた取り組みを展開し、持続可能な社会の発展に貢献していきます。

#### 行動指針

1. 全ての事業活動における生物多様性保全への積極的な取り組みの推進	• 特に事業活動に伴う排気・排水・廃棄物による大気・水・土壌などへの負荷低減に引き続き取り組み、生物多様性への影響の回避と継続的な削減を推進します。
2. 生態系サービス利用時の生物多様性への影響把握と持続可能な利用	• 事業活動において使用する生態系サービスの重要性を認識するとともに、それらの調達にあたっては、生物多様性への影響を把握し、可能な限り影響を及ぼさないよう配慮し、持続可能な利用を推進します。
3. 遺伝子組換え生物の適切な利用と管理	• 創薬研究・生産活動において使用する遺伝子組換え生物については、引き続きカルタヘナ議定書と各国の法令に基づく適正な利用・管理を行い、バイオセーフティに努めます。
4. 遺伝資源の適切な入手・利用と公正かつ衡平な利益配分	• 生物多様性条約、ボン・ガイドラインおよび各国の法令などに従い、遺伝資源の入手および利用については適切に行い、遺伝資源の利用から生ずる利益については公正かつ衡平な配分を行います。
5. ステークホルダーとのコミュニケーション、社内意識の向上	• 公的機関、民間団体などとのコミュニケーションの拡充、連携に努め、生物多様性保全に向けた活動を推進します。 • 社員への環境教育を積極的に実施し、事業活動と生物多様性との関わりや影響に関する認識と理解を高め、社内外での保全活動の推進に繋がります。

## 6 生物多様性への取り組み

生物多様性関係性マップ<sup>(1)</sup>



(1) 企業と生物多様性イニシアチブ (JBIB) の「企業と生物多様性の関係性マップ<sup>®</sup>」を参考に作成  
 (2) 遺伝資源へのアクセスと利益配分

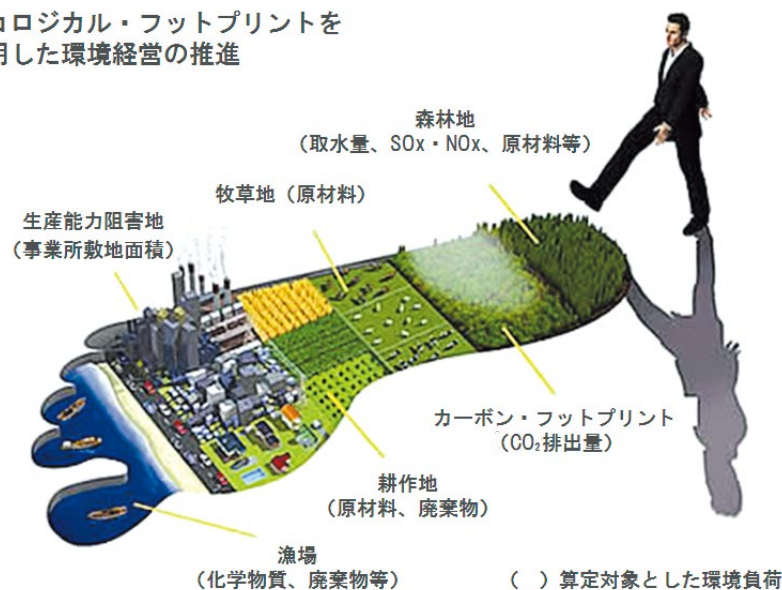
## 6 生物多様性への取り組み

### 6-2 生物多様性保全への取り組み

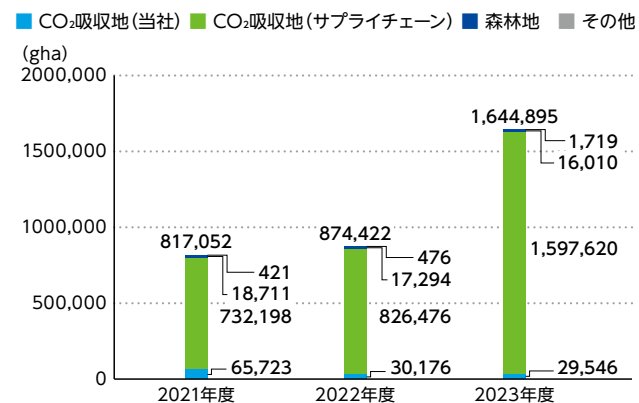
#### ● 生物多様性指標「エコロジカル・フットプリント」の算定

2014年から国内グループの事業活動における全ての環境負荷について、NGOであるGlobal Footprint.Networkの専門家と協業し、生物多様性に係る指標である「エコロジカル・フットプリント(EF)」を算定しています。算定したEFは、当社グループの「環境負荷の低減と生物多様性保全との関係(トレードオフ)」の経年変化を確認しモニタリングすることで、生物多様性を含む総合的な環境負荷の指標として活用しています。

エコロジカル・フットプリントを  
活用した環境経営の推進



#### 国内グループのエコロジカル・フットプリント



#### ● WET試験の実施

2023年度は国内すべての工場・研究所の排水を対象にWET試験\*による環境影響評価を実施し、河川等における生態系への影響は懸念されるレベルにないことを確認しました。

\* Whole Effluent Toxicity試験。魚、ミジンコ、藻の生物応答を利用して、排水の総合的な毒性影響を評価する試験

# 7 環境コミュニケーション

## 7-1 主な取り組み

取り組み	内容
ISO14001維持審査結果報告会	日 時:2024年1月22日(月) 対象者:推進担当者およびISO14001関係者(36名) *ハイブリッド開催(会議室+Teams) 内 容:ISO14001維持審査結果報告について
環境担当者講習会・温暖化対策分科会	日 時:2024年3月18日(月) 対象者:推進担当者および関連業務担当者、温暖化防止・省エネルギー対策担当者 内 容: 第一部 環境担当者講習会 「省エネ法の改正ポイントと定期報告書作成の実務ポイント」 第二部 温暖化対策分科会 「産業用高効率高温ヒートポンプについて」
「環境を感じる」作品コンテスト	募集結果:国内外のグループ会社から、総数1,796作品 ・画像部門 国内グループ:529作品 海外グループ:130作品 ・川柳&スローガン部門 国内グループ:1,059作品 海外グループ:78作品 表彰式:2024年1月17日(水)オンライン開催
環境eラーニング	テーマ:「生物多様性の現状と私たちの暮らしへの影響」 受講状況:受講者数9,666名(受講率97.3%)
COOL CHOICE プログラム	実施期間:6月12日(月)から9月1日(金) 参加登録者数:2,123名
脱炭素経営に向けた社内浸透プログラム(Global) チーム対抗イベント「DS Climate Championship」	実施期間:2024年1月15日(月)から1月29日(月) 参加登録者数:国内99チーム705名 海外36チーム262名 合計135チーム967名 実施概要:参加者のCO <sub>2</sub> 削減行動の成果(CO <sub>2</sub> 排出削減量)をリアルタイムに可視化し、地球温暖化問題、脱炭素への理解を深める。CO <sub>2</sub> 排出削減量10kg毎に1ドルを、環境保全に貢献している団体を通じて、その活動への支援として寄付する。

## 7-2 環境関連の受賞

CDP気候変動	4年連続「Aリスト」に選定
---------	---------------

# 8 サイトデータ

## 2023年度実績(サイト別データ)

### -国内グループ

INPUT		単位	第一三共		第一三共プロファーマ	第一三共ケミカルファーマ			第一三共バイオテック
			品川	葛西	平塚	小名浜	館林	小田原	北本
エネルギー	電力 (非再生可能エネルギー由来)	MWh	0	0	72	0	0	0	0
	電力 (再生可能エネルギー由来)	MWh	26,066	16,609	47,123	26,043	6,669	13,760	42,650
	都市ガス	千Nm <sup>3</sup>	1,766	3,091	10,400	3,884	2,223	882	4,853
		MWh	22,065	38,631	129,970	48,540	26,310	11,028	60,677
	その他非再生可能エネルギー	MWh	1	0	54	20	18	87	1,489
	その他再生可能エネルギー	MWh	0	0	0	0	0	0	0
	<b>合計</b>	<b>MWh</b>	<b>48,133</b>	<b>55,241</b>	<b>177,219</b>	<b>74,603</b>	<b>32,997</b>	<b>24,876</b>	<b>104,817</b>
水	上水	千m <sup>3</sup>	111	98	333	133	41	18	231
	表層水(工業用水)	千m <sup>3</sup>	0	0	0	5,262	65	0	0
	地下水	千m <sup>3</sup>	4	0	34	0	0	1,471	0
	<b>合計</b>	<b>千m<sup>3</sup></b>	<b>115</b>	<b>98</b>	<b>367</b>	<b>5,395</b>	<b>106</b>	<b>1,489</b>	<b>231</b>

OUTPUT		単位							
大気	CO <sub>2</sub>	t-CO <sub>2</sub>	3,620	6,337	21,361	7,968	4,320	1,830	10,315
	NO <sub>x</sub>	t	3	3	19	3	10	2	1
	SO <sub>x</sub>	t	0	0	0	0	0	0	0
水質	排水量	千m <sup>3</sup>	66	34	277	5,392	78	1,878	141
	COD	t	0	0	0	11	0	1	1
廃棄物	発生量	t	396	189	1,360	3,962	384	4,930	803
	排出量	t	396	189	1,103	3,962	384	1,994	803
	再資源化量	t	171	76	364	236	202	29	390
	最終処分量	t	12	2	66	43	115	151	0

## 8 サイトデータ

### -海外グループ

INPUT		単位	アメリカンリージェント			第一三共ヨーロッパ	第一三共アルトキルヒ	第一三共製薬(上海)	第一三共ブラジル
			シャーリー	コロンバス	ブレア	パッフェンホーフェン	アルトキルヒ	上海	アルファビレ
エネルギー	電力 (非再生可能エネルギー由来)	MWh	9,922	19,564	1,258	0	761	7,739	43
	電力 (再生可能エネルギー由来)	MWh	0	0	0	12,321	890	559	5,772
	都市ガス	千Nm <sup>3</sup>	1,121	2,152	243	602	610	504	0
		MWh	14,648	28,111	3,177	7,869	7,969	6,584	0
	その他非再生可能エネルギー	MWh	2,008	0	11	636	45	0	1,122
	その他再生可能エネルギー	MWh	0	0	0	9,069	0	0	211
<b>合計</b>	<b>MWh</b>	<b>26,577</b>	<b>47,675</b>	<b>4,445</b>	<b>29,896</b>	<b>9,665</b>	<b>14,881</b>	<b>7,149</b>	
水	上水	千m <sup>3</sup>	76	131	8	59	65	41	10
	表層水(工業用水)	千m <sup>3</sup>	0	0	0	0	0	0	0
	地下水	千m <sup>3</sup>	0	0	0	0	0	0	0
	<b>合計</b>	<b>千m<sup>3</sup></b>	<b>76</b>	<b>131</b>	<b>8</b>	<b>59</b>	<b>65</b>	<b>41</b>	<b>10</b>

OUTPUT		単位							
大気	CO <sub>2</sub>	t-CO <sub>2</sub>	8,205	13,608	806	1,420	1,474	5,564	212
	NOx	t	2	0	0	1	0	0	0
	SOx	t	0	0	0	0	0	0	0
水質	排水量	千m <sup>3</sup>	76	131	7	48	65	34	6
	COD	t	0	0	0	0	1	0	0
廃棄物	発生量	t	0	0	0	0	0	0	0
	排出量	t	228	322	194	678	362	119	182
	再資源化量	t	72	71	60	530	345	67	131
	最終処分量	t	156	252	134	147	0	51	50

# 9

## ESGデータ(環境)

分野	項目	項目詳細(内訳)	対象範囲	単位	2015年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
基本情報	売上	売上	合計	百万円	986,446	962,516	1,044,892	1,278,478	1,601,688
	従業員数	従業員数	合計	人	15,249	16,033	16,458	17,435	18,726
CO <sub>2</sub>	エネルギー起源CO <sub>2</sub> 排出量	営業車両	海外	t-CO <sub>2</sub>	21,204	7,344	9,090	10,017	9,753
			国内	t-CO <sub>2</sub>	6,725	4,345	4,652	4,700	4,570
			グローバル	t-CO <sub>2</sub>	27,928	11,688	13,741	14,718	14,323
		オフィス	海外	t-CO <sub>2</sub>	4,549	3,543	3,099	2,270	2,178
			国内	t-CO <sub>2</sub>	6,047	4,928	4,963	2,587	2,338
			グローバル	t-CO <sub>2</sub>	10,597	8,471	8,062	4,857	4,516
		工場・研究所	海外	t-CO <sub>2</sub>	23,524	32,682	29,467	30,649	31,288
			国内	t-CO <sub>2</sub>	136,955	111,428	127,824	55,840	55,750
			グローバル	t-CO <sub>2</sub>	160,480	144,111	157,291	86,489	87,038
		合計	海外	t-CO <sub>2</sub>	49,277	43,570	41,655	42,937	43,219
			国内	t-CO <sub>2</sub>	149,728	120,701	137,439	63,127	62,658
			グローバル	t-CO <sub>2</sub>	199,005	164,270	179,094	106,064	105,877
	非エネルギー起源CO <sub>2</sub> 排出量	焼却炉	国内	t-CO <sub>2</sub>	3,922	9,835	6,344	3,700	3,362
	CO <sub>2</sub> 排出量合計	スコープ1+2合計	グローバル	t-CO <sub>2</sub>	202,927	174,105	185,439	109,764	109,239
		スコープ1+2+3合計	グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	1,842,394	2,128,195	2,315,743	4,517,975
	GHGプロトコル区分によるCO <sub>2</sub> 排出量 スコープ1、スコープ2	スコープ1(燃料等の消費)	海外	t-CO <sub>2</sub>	29,756	18,148	20,659	21,617	21,398
			国内	t-CO <sub>2</sub>	75,236	69,103	68,747	64,388	63,848
			グローバル	t-CO <sub>2</sub>	104,992	87,252	89,405	86,006	85,245
		スコープ2(購入電力・蒸気)	海外	t-CO <sub>2</sub>	19,522	25,421	20,997	21,320	21,821
			国内	t-CO <sub>2</sub>	78,414	61,432	75,036	2,439	2,173
			グローバル	t-CO <sub>2</sub>	97,936	86,853	96,033	23,758	23,994
	GHGプロトコル区分によるCO <sub>2</sub> 排出量 スコープ3	カテゴリ1:購入した製品・サービス	グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	1,483,630	1,687,965	1,892,504	3,887,790
		カテゴリ2:資本財	グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	75,261	148,989	161,326	220,563
カテゴリ3:スコープ1,2に含まれない燃料、エネルギー関連活動		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	18,950	20,133	24,051	28,217	
カテゴリ4:輸送、配送(上流)		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	25,778	29,281	47,270	49,275	
カテゴリ5:事業から出る廃棄物		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	11,055	8,147	10,517	10,800	
カテゴリ6:出張		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	9,343	13,329	34,473	44,043	
カテゴリ7:雇用者の通勤		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	10,691	9,546	10,624	4,926	
カテゴリ9:輸送、配送(下流)		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	17,706	13,817	14,163	145,857	
カテゴリ12:販売した製品の廃棄		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	2,367	2,501	2,747	4,072	
カテゴリ13:リース資産(下流)		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	2,913	2,913	2,820	2,248	
カテゴリ15:投資		グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	10,595	6,134	5,485	10,945	
スコープ3合計	グローバル	t-CO <sub>2</sub>	—	1,668,290	1,942,756	2,205,979	4,408,736		

# 9 ESGデータ(環境)

分野	項目	項目詳細(内訳)	対象範囲	単位	2015年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
エネルギー	エネルギー	電力(非再生可能エネルギー由来)	グローバル	MWh	203,370	196,642	207,846	50,792	51,260
		電力(再生可能エネルギー由来)	グローバル	MWh	10,087	16,505	21,596	179,962	204,554
		都市ガス	グローバル	千Nm <sup>3</sup>	29,263	29,260	30,621	29,615	32,320
			グローバル	MWh	367,617	365,683	382,690	370,124	406,901
		LPG	グローバル	t	60	52	60	22	8
			グローバル	MWh	832	736	853	315	120
		軽油	グローバル	KL	77	228	150	549	59
			グローバル	MWh	812	2,390	1,569	5,750	624
		天然ガス	グローバル	KL	0	0	0	40	69
			グローバル	MWh	0	0	0	610	1,044
		灯油	グローバル	KL	208	228	236	196	144
			グローバル	MWh	2,110	2,323	2,405	1,997	1,460
		ガソリン	グローバル	KL	10,813	3,644	4,049	4,433	4,298
			グローバル	MWh	100,346	35,024	38,919	42,608	39,885
		ディーゼル用軽油	グローバル	KL	1,427	1,250	1,570	1,521	1,491
			グローバル	MWh	15,071	13,092	16,435	15,929	15,746
		その他非再生可能エネルギー	グローバル	MWh	3	12	37	6	2
再生可能エネルギー由来燃料	グローバル	MWh	286	2,235	4,210	6,010	8,305		
その他再生可能エネルギー	グローバル	MWh	1,491	6,296	6,811	6,540	6,887		
合計	グローバル	MWh	702,025	640,938	683,371	680,643	736,789		
再生可能電力利用率	グローバル		4.7%	7.7%	9.4%	78.0%	80.0%		
フロン	フロン漏洩量	国内	t-CO <sub>2</sub>	977	1,056	260	1,014	1,081	
水使用	グループ全体の水使用量	取水量: 上水	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	822	1,299	1,353	1,323	1,355
		取水量: 表層水(工業用水)	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	7,735	5,370	5,305	5,315	5,327
		取水量: 地下水	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	1,754	1,619	1,731	1,623	1,509
		取水量: 合計	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	10,310	8,288	8,390	8,261	8,191
		排水量: 公共用水域	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	5,045	5,288	7,642	7,378	7,490
		排水量: 下水道	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	4,866	643	744	711	742
		排水量: 合計	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	9,912	8,033	8,386	8,090	8,232
		水消費量	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	398	255	3	171	-41
		水リスクの高い地域での水使用量	取水量	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	50	53	49	53
	排水量		グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	46	46	36	43	39
	水消費量		グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup>	4	7	12	11	12
	水質汚濁負荷量	COD	グローバル(公共用水域に排する工場および研究所)	t	13.5	13.5	15.7	14.5	14.9



分野	項目	項目詳細(内訳)	対象範囲	単位	2015年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
廃棄物	廃棄物排出量(外部委託処理分)	排出量(有害廃棄物含む)	グローバル(工場および研究所)	t	—	9,979	9,970	12,189	10,909
		排出量	グローバル(工場および研究所)	t	—	6,696	5,622	4,995	5,435
	廃棄物(有害廃棄物以外)	再資源化量	グローバル(工場および研究所)	t	—	6,289	3,851	2,561	2,744
		排出量(再資源化量を除く)	グローバル(工場および研究所)	t	—	407	1,771	2,434	2,691
		焼却量	グローバル(工場および研究所)	t	—	335	1,637	1,955	2,302
		最終処分量	グローバル(工場および研究所)	t	—	664	229	1,172	1,179
	有害廃棄物	排出量	グローバル(工場および研究所)	t	—	5,611	4,348	7,194	5,474
		サーマルリサイクル	グローバル(工場および研究所)	t	—	5,229	3,952	6,880	5,102
		焼却量	グローバル(工場および研究所)	t	—	382	396	314	372
		最終処分量	グローバル(工場および研究所)	t	—	0	0	0	0
	廃プラスチックリサイクル率	グローバル(工場および研究所)	%	—	76.1	59.3	69.3	72.4	
大気汚染	大気汚染物質排出量	SOx排出量	グローバル(工場および研究所)	t	0.8	1.5	1.0	2.3	0.8
		NOx排出量	グローバル(工場および研究所)	t	51.0	48.8	49.6	53.2	45.6
	PRTR対象物質 取扱量、排出量、移動量	取扱量	国内(工場および研究所)	t	3,686	2,063	1,569	2,074	1,340
		排出・移動(大気)	国内(工場および研究所)	t	83	3	2	1	3
		排出・移動(水域)	国内(工場および研究所)	t	0	0	0	0	0
		排出・移動(下水道)	国内(工場および研究所)	t	120	0	0	0	0
		排出・移動(水域+下水道)	国内(工場および研究所)	t	120	0	0	0	0
		排出・移動(廃棄物)	国内(工場および研究所)	t	667	1,861	1,562	2,072	1,038
	VOC 環境省が示す主な100種	大気排出量	国内(工場および研究所)	t	26.4	1.5	1.5	0.6	0.8
	容器包装	容器・包装回収・リサイクル量 (再商品化義務量)	ガラスびん(無色)	国内	t	158	203	172	515
ガラスびん(茶色)			国内	t	386	252	200	472	128
PETボトル			国内	t	0.0	0.1	1.0	1.0	0.1
プラスチック製容器包装			国内	t	1,436	1,265	1,205	1,903	1,136
紙製容器包装			国内	t	59	39	31	14	25
国内グループ			合計	t	2,039	1,758	1,609	2,906	1,432

## 9 ESGデータ(環境)

分野	項目	項目詳細(内訳)	対象範囲	単位	2015年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
環境効率	CO <sub>2</sub> 排出原単位(売上高)	CO <sub>2</sub> 排出量/グループ売上高	グローバル	t-CO <sub>2</sub> /百万円	0.206	0.181	0.177	0.086	0.068
	CO <sub>2</sub> 環境効率(売上高)	グループ売上高/CO <sub>2</sub> 排出量	グローバル	百万円/t-CO <sub>2</sub>	4.86	5.53	5.63	11.65	14.66
	CO <sub>2</sub> 環境効率指数(売上高)	2015年度を100とした場合	グローバル	-	100	114	116	240	302
	廃棄物発生原単位	廃棄物排出量/グループ売上高	グローバル(工場および研究所)	t/百万円	-	0.010	0.010	0.010	0.007
	廃棄物環境効率	グループ売上高/廃棄物排出量	グローバル(工場および研究所)	百万円/t	-	96.5	104.8	104.9	146.8
	廃棄物環境効率指数	2020年度を100とした場合	グローバル(工場および研究所)	-	-	100	109	109	152
	水使用原単位	水使用量/グループ売上高	グローバル(工場および研究所)	千m <sup>3</sup> /百万円	-	0.00861	0.00803	0.00646	0.00511
	水環境効率	グループ売上高/水使用量	グローバル(工場および研究所)	百万円/千m <sup>3</sup>	-	116.1	124.5	154.8	195.5
	水環境効率指数	2020年度を100とした場合	グローバル(工場および研究所)	-	-	100	107	133	168
マネジメント	CO <sub>2</sub> 排出原単位(正規従業員数)	CO <sub>2</sub> 排出量/従業員数(人)	グローバル	t-CO <sub>2</sub> /人	13.3	10.9	11.3	6.3	5.8
	国内グループサイトのISO取得状況(工場)	国内グループ取得サイト数	国内	サイト	5	5	5	5	5
	海外サイトのISO取得状況(工場)	海外取得サイト数	海外	サイト	1	4	4	4	4
法令遵守	グループ全体のISO取得状況(工場)	取得サイト数	グローバル	サイト	6	9	9	9	9
	環境法令違反等	1万ドル以上の罰金等を受けた回数	グローバル	回数	0	0	0	0	0

\*各環境パフォーマンスデータは過去の関連会社の買収・売却による影響を遡って反映しています(売上や従業員数は除く)。



発行 第一三共株式会社 サステナビリティ部

発行日 2024年11月

本誌は第一三共ウェブサイトに掲載しています。